

## 令和 3 年度大（応）神塚古墳（寒川町No.8 遺跡）保存目的のための調査概要

遺跡の名称	大（応）神塚（寒川町 No. 8 遺跡）
調査実施日	令和 4 年 2 月 22 日（火）～3 月 31 日（木）（予定）
所在地	高座郡寒川町岡田 2385
調査機関	寒川町教育委員会 教育政策課
調査担当	小林秀満
調査面積	約 20 m <sup>2</sup> （トレンチ 2 カ所）
調査原因	保存目的
発見遺構	古墳時代：古墳後円部西側溝（周溝）
出土遺物	弥生土器片、土師器

## 調査成果

大（応）神塚古墳は、寒川町指定重要文化財第 19 号であり、町内唯一の墳丘を保った古墳である。明治 41 年（1908）、東京帝国大学の坪井正五郎氏を中心とした発掘調査が実施された他は、昭和 57 年に神奈川県教育委員会において測量調査を実施したのみである。これらの調査から、前方後円墳であり、5 世紀ごろの造築であろうとされている。

しかし、明治期の調査であり、遺物の出土状況、古墳の範囲や周溝の有無、構築の年代や方法など不明な点が多いのが現状である。

今回、古墳の形態や、範囲、構築年代などの古墳の性格を把握し、今後の保存方法検討のための基礎資料とするための調査を実施した。

本年度は、後円部西側の墳丘裾及び周溝と思われる溝の確認を目的として実施した。

後円部の東西方向（短軸）、西側、北西側に幅 2m 長さ 5m でトレンチを 2 カ所設定した。北西側トレンチを 1TR、西側トレンチを 2TR とした。

以下今回のトレンチ（TR）ごとに確認された事項を述べる。

## 1TR

後円部北西方向に 2m×5m でトレンチを設定。表土除去後、宝永スコリアを主体とする層、宝永スコリアまじりの近世層が確認された。近世層を除去後、徐々に黒色の発泡スコリアを含む層が確認された。最終的にローム層まで掘込が確認され、ほぼ全体が溝覆土と思われた。墳丘側は墳丘立上りが確認された。墳丘外側も若干高くなり、周溝のような状況が確認された。

このトレンチでは他の溝からは溝覆土下層に見られる黒色発砲スコリア層の下に黒褐色土層があるていどの厚みで確認され、墳丘地山層の上にも黒褐色土層が確認された。

## 2TR

後円部西方向に 2m×5m でトレンチを設定。1TR と同様表土除去後、宝永スコリアを主体とする層、宝永

スコリアまじりの近世層が確認された。近世層を除去後、徐々に黒色の発砲スコリアを含む層が確認された。最終的にローム層まで掘込が確認され、ほぼ全体が溝覆土と思われた。墳丘側は墳丘立上りが確認された。墳丘側から外側にかけてなだらかに下がっていき、外側の立上りは確認できなかった。また南側に若干窪んでいる状況が見られた。

#### まとめ

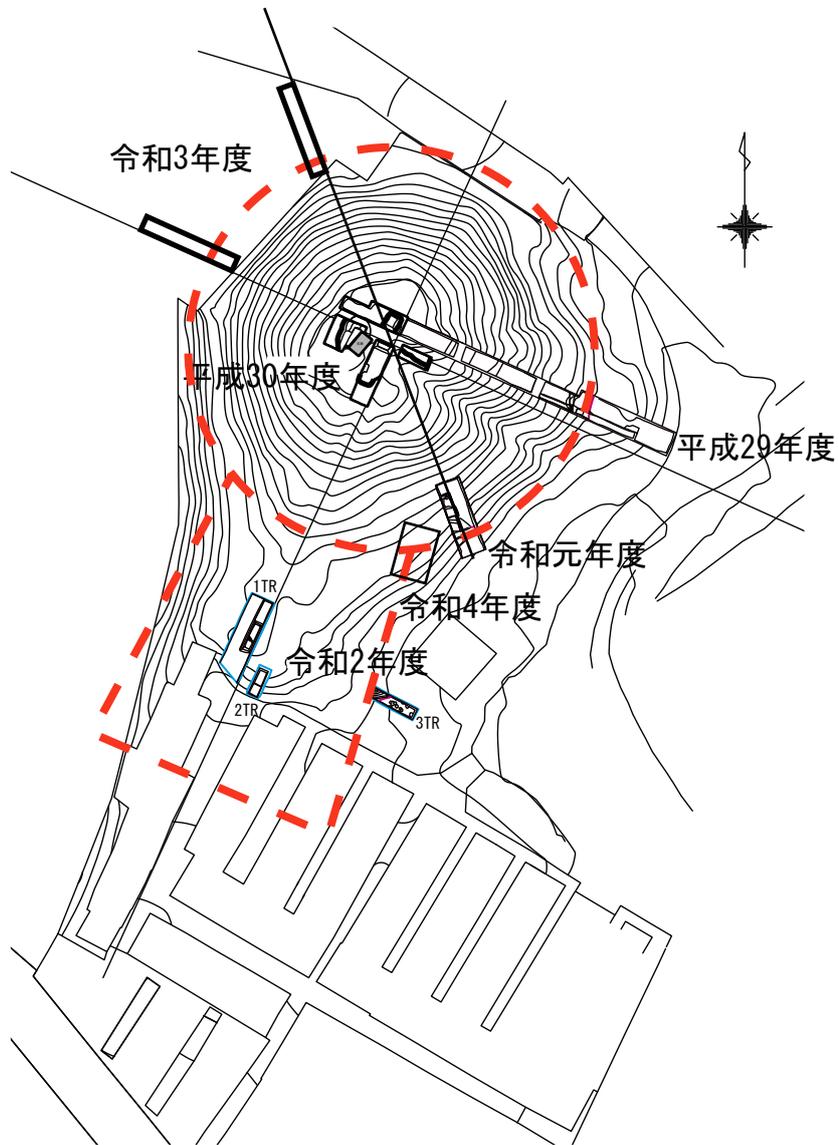
今回の調査目的である、後円部の裾及び周溝の把握であるが、おおよその把握はできた。後円部の裾が確認され、以前の調査と同様に後円部の直径は約 30mになると推定された。

墳丘裾は地山を削り斜面を作成させている状況がみられた。2TR は東側で見られた溝と同じく、下層に黒色発砲スコリア層が堆積し、墳丘外側の溝の立上りが確認されず、底面がなだらかに外側に下がっている状況が確認された。

これに対し 1TR では地山と黒色発砲スコリア層の間にもう 1 面黒褐色土層が確認され、溝外側が若干高くなり一般的周溝のような状況に似た状況が見られた。黒褐色土層は溝底部のみならず、墳丘側の斜面部にも確認されている。この黒褐色土層が人為的のものか墳丘土の流れ込み土なのか考察する必要があると思われた。

また遺物は今回も弥生土器、土師器の土器片が少量確認されたのみで、年代を推定できるような遺物は確認されなかった。

大（応）神塚古墳保存目的のための確認調査計画図（1/600）







調査区全景（墳丘から）



調査区全景（西から）



1 トレンチ (北西から)



2 トレンチ (西から)